

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第40集 (2008年度) 2009年3月発行：233-250

日中高等教育機関に学ぶ中国人学生の友人観

上原麻子

日中高等教育機関に学ぶ中国人学生の友人観¹⁾

上原麻子*

はじめに

留学生にとって留学先で滞在国の友人を得ることは、学業目的の達成とはまた比べられない喜びである。しかし、異文化をもつ人との新たな関係構築には困難が伴うことが多い。留学生が情緒的に一体感をもつのは、通常、同国あるいは他国からの留学生であることが多いと内外で報告されている (Furnham and Bochner, 1982; 田中, 2000; 横田, 1993他)。近年は、日本における高等教育機関に学ぶ留学生の最大集団である中国人学生 (平成19 (2007) 年度で62% (文部科学省, 2008)) を対象に、彼らを支援する対人関係を多角的に調べた研究 (周・深田, 2002) もあるが、やはり同様の結果を提示している。こうした留学生を取り巻く社会的ネットワーク研究は、彼らの対人関係の実態を理解し、現地社会への適応促進研修にも役立つ。さらに、異文化からの留学生がもつ主観的な友人観も現地学生との関係構築に影響を与える可能性があり、そうした研究もあれば有用であろう。そこで、本研究は中国大陸と日本の高等教育機関に学ぶ中国人学生を対象に彼らの友人観を調査した。

次章の先行研究調査では、多分野の文献渉猟がなされるも、現代中国人大学生・院生を対象とする友人関係の体系的実証研究が殆どないことが明らかにされる。2章では、研究と分析の方法として、仮説生成に有用な自由記述回答式の質問紙技法と、質的データの数量的処理が可能な内容分析の採用が記される。続く結果の章では、友人関係の普遍性に通じるように見える回答に加え、参加者のなかに日本人との交流に「壁」を感じている者のあることが報告される。終章では、そうした結果を、主に随筆や社会人対象の先行研究にあてはめて考察し、回答者らの友人関係が日本人よりも深いという示唆的知見が得られたこと、及び今後の一層体系的な研究の必要性が提示される。

1. 文献調査

高島 (高島・成瀬, 1985) は中国知識人の友情の詩歌を翻訳し、その解説において、友情が中国の詩の歴史の中で目立ってくるのは、後漢 (25~220A.D.) から三国 (220~265A.D.) にかけてであると記す。友人というものが、地縁・血縁の人間関係ではなく、中央集権化、官僚組織の発達という社会構造の変化に伴って、「士」と呼ばれる人々が社会進出をして作った人間関係成立の原理であることが指摘されている。「士」はすでに周代 (1122~221B.C.) に、一般に官位・俸禄を有し、人民の上位にある者という意味があり、孔子 (551~479B.C.) やその弟子の多くはこの階層に属し

*常磐会学園大学国際コミュニケーション学部教授

ていた。しかし、なかには一時的にも官位をもたない者もあったので、ここでは学徳を修めた知識人と解しておいてよいと考える。むしろ重要なのは、その核心が心の共鳴、つまり仲が良く、対等で、志を同じくする等の意味をもつ友情には、自律した人格が必要であり、それは社会的発展の影響を受けて出現したということである。このようにすでに古代にあった「自立的人格重視は、中国知識人の最も良質な部分として後代に受け継がれていく」（高島・成瀬，1985，29頁）。

しかし他方において、高島は中国人の友人関係に関し二つの留意点を記す。一つは相互扶助が通念として作用していることである。「友たる者は、其の徳を友とするなり」（孟子）は理想の友情であるが、中国の知識人は政治の世界に生きた人々であったので、その理想の達成は実に困難で、状況により多様な相互支援があったことが指摘されている。もう一つは、中国人の対人関係を理解するに、知識人の理想がある一方、農業国としての長い歴史において、血縁・地縁の関係形成原理が古代から現代にいたるまで継続していることである。日本文学者が古代よりの中国知識人の友情の詩歌研究を通してみたその友人関係分析を概観した。次に20世紀以降の現代の友人関係に関する研究をみよう。

沢田（1974）は、子どもの頃に外界にのみ向けられがちであった関心が、青年期には自身の内的世界に注がれるようになり、外の事物や他者と異なる自己を見つめて、外界との様々な矛盾から孤独を意識することが多くなり、さらに親への依存関係から独立する心理的離乳期でもあるため、友人関係の果たす役割が重要であることを強調する。それ故、青年が求める友人とは単なる遊び仲間ではなく、自分と対等の立場にあり、共通の問題を共に悩み話し合い、理解し合える者でなければならない。沢田によれば、東京大学学部生に対する継続的調査からも、「真の友人を求めている」という項目が常に1～3位の上位にチェックされる結果があり、孤独を体験しつつ友を求め、友との交流中にも疎外感から逃れられない矛盾を内包するのが青年期の友人関係の特質である。そして、友人関係成立の契機は、クラスで座席が近かったなど外部事情による物理的接近から、何らかの事情で親切にされたり、同情、愛着を覚えたり的情緒的な接近、尊敬、共鳴等の人格特性の魅力による相互接近までがある。友人関係の結びつきが、趣味や好意で結ばれる同好的なもの、尊敬と好意で結ばれる人格的結合、支援・利益を求める関係等々多様であること、及び青年期には物理的接近が減少し、人格的結合に向かう傾向が増すことが言及されている。

英国の社会学者アラン（1993）は、多くの現代心理学者が友情に関し、個人に焦点をあてて、パーソナリティ、動機づけ、価値観と親密さの水準あるいは関係の強さ等を研究する傾向にあり、社会における実際の友人関係を理解するには不十分であると批判する。そうした心理学的文献の特徴は、友情が親族や同僚などと異なり制度的規定ができず、人々が互いに対してもつ関係の質に係わるため、その内容、精神面、心理面に焦点があてられ、社会過程との関連での研究が少なかったとアランは分析する。しかし、彼は心理学的研究が指摘してきた友情の中心的要素、つまり平等性、自発的選択等を否定するのではない。彼は友情を社会的構築物と捉え、それらを社会・経済的要因を含む直接的な社会環境の中に入れて研究すべきであると説くのである。具体的にアランは、1) 自由選択とみられる友情の受ける拘束、つまり友人形成に及ぼす社会的諸要因の解明と、2) 友情という結びつきの社会的効用の分析を目的として友情の社会学的研究を行った。

第1の研究目的について、友人とは本質的に平等な関係であるため、やりとりされる行為のバランスにたえず配慮がなされることから拘束が生じると論究される。互いを平等に扱い、関係の中で全般的に互酬性を保たねばならないから、行為の等価交換が必要になる。友情のための資源には時間や金銭に加え、情緒的支援、自己開示などの心理面から、話しの内容・話題といった思想・精神面に関わるものまで多様である。互酬性は頻繁でなくても長期的にバランスが必要なので、資源面に余り不均衡があると関係が崩れる。アランに従えば、友人たちが大体、同性、同世代、同階層、同様な家庭環境、類似の民族的背景、宗教が重要な地域では同宗教の者になりがちなのは、対等であることが友情の重要な構造的特質であるためである。このように友情を個人の「直接的社会環境」の中に入れると、それは本人の意思や自由選択、パーソナリティだけの問題でなく、年齢、ジェンダー、学歴、階級、職業、居住地等、個人を超えた社会的諸要素の影響を受ける。

第2の目的である友情の社会的効用には、情緒的・道徳的支援、生活面及び物質面の支援、社会的アイデンティティ支援の資源が分析される。これらの支援は、事柄により程度差はあるが、日常生活でほとんどの人が友人から得ているものである。物質的支援の中には友人が就職、職業関連の重要な情報源になることもある。しかし、アランによれば、関係の中心は平等性と互酬性であるので、よほど固い基盤に築かれた友人以外には、多額の金銭的支援などは求められない。基盤の緩い関係ほど「返礼」が重要になると分析される。友情がアイデンティティ感覚に与える影響についても、それが本質的に自発的で平等であり、社会的地位と切り離された「個」としての人間が問題であるために、相手との同一視が一層明確になることによると説明される。すなわち、友情関係は他の役割とは無関係の場を提供するが、多くの場合その結びつきはそうした役割の上に構成され、社会的アイデンティティをより強固にする機能があるということである。

アランは友情を哲学者や思想家の説く理想のものから、日常生活におけるふつうの友人関係にまで拡大して、それらを個人が自由活動の空間として用いる「直接的社会環境」の枠組みに入れて考察した。その結果、友情が考えられていたほど自由選択による平等なものではなく、心理学的研究が属性とした年齢、性、学歴、職業等が逆にそれを拘束する社会構造的な諸要因であることを知見する。友人観への文化的影響を知ろうとする小論に、アランの研究は示唆的である。

しかしアランの批判にもかかわらず、友人は人生における重要な対人関係であるため、友情研究には心理学分野の文献調査は不可欠である。なかでも社会心理学、比較文化心理学、文化心理学は社会的環境や文化が人の心理過程、行動に与える影響を実証的に研究している。近年は、日本人社会心理学者の中にアジア文化の文脈の中で欧米発達の理論等を見直そうという動きがあり(山口編, 2003)、1998年からは *Asian Journal of Social Psychology* という学術雑誌の刊行もある。

そこで以下の雑誌を中心に1993年まで15年遡り (*Asian Journal of Social Psychology* は1998年まで)、掲載される文献調査を行った。対象の雑誌は、*Asian Journal of Social Psychology*, *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *Psychological Review*, 『異文化間教育』, 『社会心理学研究』, 『心理学研究』であった。調査の結果、中国人の友情に関する論文は *Asian Journal of Social Psychology* に香港の中国人大学生対象で3本 (Lee and Bond, 1998; Tam and Bond, 2002; Wong and Bond, 1999) あっただけである。Bond らの一連の研究の特徴は、大学の寮にペアで住む学生の両者に質問紙配布をして自身と相手

に対する感覚、観察を調査しているところにある。

Lee と Bond (1998) は、パーソナリティ特性と友情関係を分析するために、18歳から25歳の寮に入って6カ月になる男性46組、女性85組を対象に、最初に互いに友情を感じているかどうかを尋ねて、次に相互に友情を感じているペアに以下の4測定を行った。

- 1) パーソナリティの類似性 (similarity) :
 - a) 両者それぞれが見た自身のパーソナリティ特性の比較
 - b) 自身が見るパーソナリティとルームメイトが見た相手のパーソナリティ特性の比較
- 2) 望ましいパーソナリティ (personality desirability) 特性の類似性 :
 - c) 相手が望むであろうと思うパーソナリティ特性を自身が有する程度
 - d) ルームメイトがもつ望ましいパーソナリティ特性の程度

パーソナリティ調査には「情緒の安定性」、「経験へのオープンさ」、「外向性」、「支援的」、「応用性」、「自制」、「自己表現」(assertiveness)、「知性」という8側面が測定された。結果はdだけが「高い友情がある」集団と「低い友情」集団間に統計的な有意差があり、前者の高いレベルで相互に好感をもつルームメイトたちの友情と、測定された社会的に望ましいパーソナリティのうちオープンさ、外向性、支援的、知性の4側面に相関が見出された。Lee と Bond は、これまで西欧で行われてきた多くの先行研究結果同様、望ましいパーソナリティ特性の有無を、自身が意識しているかどうかよりも、相手が知覚することが友情関係の発展、育成、維持に重要であると実証する。

Wong と Bond (1999) は、パーソナリティ特性とともに、自己開示という社会的行動に注目して、26組の男性と31組の女性の中国人寮生ペアを対象に友情との関連を研究した。自己開示に焦点を当てたのは、対人関係領域で長く研究されており、特に Altman と Tylor (1973) が、友情が発展するにつれ、両者間で親密な情報が一層交換されるようになり緊密化が進むと論証した社会的浸透理論 (social penetration theory) に論拠をおいたためである。ルームメイト・ペアの双方に配布された質問紙は、互いのパーソナリティ、自己開示行動の量と強度、そして友情の強さを測定するよう準備された。主な結果は、回答者測定自己開示の量と強度及びルームメイト報告の自己開示量が、友情の強さと相関があることが判明した。これは他者の自己開示量が友情の強さと関連するという西欧の先行研究結果と一致していた。しかし、西欧の先行研究が報告するルームメイトの相手のパーソナリティ知覚と回答者の自己開示の有意な関連は本調査には見られなかった。さらに、パーソナリティと友情の関連については、自己査定応用性、及びルームメイト査定相手の知性と支援的が回答者測定友情の強さを最もよく予測する変数であった。

Tam と Bond (2002) は Wong と Bond の上記の結果のパーソナリティ側面 (知性と支援性) が友情の強さとは関連があったのに対し、それが自己開示とは有意な相関がなかったことに着目し、友情を育てるに自己開示よりむしろ対人関係の行動が関わっているのではないかと考え、パーソナリティと相手に対する行動面に焦点を当てて調査を行った。調査された行動面とは他者を支援する「恩恵」(beneficence) と他者尊重のための「自制」(restraint) である。後者は Brown と Levinson (1987)

が人の相互作用には「肯定的面子」(positive face)と「否定的面子」(negative face)の両者の関係があるとする理論に基づいて構成された操作概念である。BrownとLevinsonのいう肯定的面子は対話中に相手をほめたり持ち上げたりして積極的に他者の面子を高める行動であるのに対し、否定的面子とは邪魔や迷惑をかけないようにして他者を尊重することである。18歳から22歳の89人の中国人寮生を対象に、本調査にも多数項目からなるパーソナリティ、対人行動、友情の強さの測定法が用意され、ルームメイト双方が査定した。結果は予想通り、恩恵と自制行動という2要因、特に前者が、ルームメイトらの友情の強さに高いレベルで関連していた。TamとBondは他者への好意ある行動が関係を決定する最も強力な要因であると実証する。

Bondと同僚のこれらの調査は、高等教育機関に学ぶ中国人学生の友情研究が殆どないために貴重である。しかし、香港は特殊な歴史環境にあるため、結果をそのまま中国大陆の対象者の参考にするわけにはいかない。また、彼らの一連の調査の背後にある研究視座は、文化心理学における中心的議論の一つである北山ら(北山, 2003; Markus and Kitayama, 1991他)の「相互独立的自己観」対「相互協調的自己観」で、日本で役立つ中国人の友情観への文化的影響調査には課題をもつ。「相互独立的自己観」とは西欧文化に優勢な個人主義に基づき、「相互協調的自己観」は集団主義を基礎にする東洋文化に優勢な概念である。すなわち、「前者の自己とは他者や周りのことごとから切り離された実体であるのに対し、後者の自己は他の人や周りのことごとと結びついた関係志向的実体」(北山, 2003, 43-44頁)とみなされる。この研究視座に基づけば、日本も中国も相互協調的文化と包括的にまとめられ、多様な両国文化の差異が見えにくくなる。

西欧からみれば日中両国は関係志向的、集団主義的文化に括れるかもしれないが、中国人の集団帰属意識は家族、故郷、特に内集団の核が家族であるのに対し、日本人のそれが会社等の勤務先にまで拡大することが指摘されている(梁・井上, 2003)。歴史的に両国社会も、他国同様、上下の対人関係により社会秩序を構成しており両国では忠孝がその中心と同じであっても、中国では孝が上位にあり忠が下、日本では忠が上で孝が下位になり、国民性の違いにまでその影響がある(内山, 1994)。さらに、中国人の自己観には「相互協調的自己観」と共に「相互独立的自己観」が見られるという実証研究もある(馬, 2003; 高田, 2000)。中国人の社会的行動が、日本人より、むしろ欧米人に近いことは、その起因を調べた梁・井上(2003)の「どんな職業についていても、経営者や上司に対する義理、人情より、現実的な報酬を求めて転職するのは中国人社会では普通」(177頁)という論述にもみられる。

またBondらは香港の大学生の友情発展を研究するに、その重要な側面の一つに「自制」(restrain)を挙げる。米国を中心とする西欧社会の視座からみると、中国人は「自制的」かもしれない。しかし、中国における日本人留学生の異文化適応をコミュニケーション論の視座から調査した張(2002)は、日本人留学生の「会話の友」²⁾である中国人学生にも面接をして、日本人学生の対人行動が「親しき仲にも礼儀あり」に対し、中国人は「親しき仲には礼儀なし」が規範的であることが、両者の友人関係促進の壁になり得ることを知見している。このように、日中両国の社会における内集団、自己観、対人関係の異同を記した随筆や諸研究は、特に友人関係に焦点をあてたものではないが、今後の友人関係に関する研究に重要である。

集団で共有される人々の自己観、価値志向は、人の心理プロセス、コミュニケーションの仕方、行動に影響を与えるという文化心理学者らの主張に賛同する。そのため、小論では日本と中国を協調的、集団主義的文化とひとまとめにせず、それぞれの文化、人々の行動の異同を客観的に研究したほうが良いと考える。本研究はまた、最初から先行研究に記された主要な概念に焦点をあてるのではなく、留学生活で、また都市化する現代社会で重要な友人関係構築の基礎になる友情観を、中国人学生を対象に、可能な限り中国文化の文脈で研究することを視野に、仮説生成のための探索的調査と位置づけて実施した。

2. 研究及び分析の方法

高等教育機関に学ぶ中国人学生の友人観を知るために、質問紙調査を行った。対象者は中国大陸の5大学で日本語を学ぶ学生306人と、日本に留学する中国人学生205人、計511人である。大陸で日本語を学ぶ学生を対象にしたのは、本調査で対象者の友人観とともに日本人との交流の困難な点を尋ねているので、彼らが一般学生に比べて日本人との接触機会が多いであろうと判断したからである。質問紙では属性のほかに、以下の2質問を自由記述回答形式で尋ねた。

1. あなたにとって友人とはどんな人のことですか。その関係の特徴、性格的特徴などについて書いてください。
2. 日本人との付き合いで困ったことがあったでしょうか。あれば、具体的に書いてください。

質問紙はまず日本語で構成し、比較文化研究法の1技法である「逆翻訳」(back-translation)をして中国語版をも作成した。回答は日本語版にも日本語と中国語のどちらの言語で回答してもいいと明記し、答えやすいほうで答えてもらった。データ収集は、大陸では2004年11月と2005年9月に、日本では2005年7月から2006年1月にかけて行った。得られた中国語の回答は日本留学中の中国人と日本人の大学院生計4人に日本語に翻訳してもらった。

回答の分析については、内容分析の基本である「質的分析」(quality analysis)技法を採用した。これは最初に全ての回答を読み、それらがいくつかのカテゴリーに分類できることを確認して、それらのカテゴリーを枠組みとして、記述内容を分析する方法である。両質問の分析枠組みとなった具体的なカテゴリーは、次の結果の章で報告するが、その他を含めて10の分析カテゴリーが作成できた。この分析法の信頼性を求めるに、分析者が1人であったため、特に留学生の友人観の全回答を取り上げ、なか約1年半の期間をおいて2度分析した。第1回目は2006年10月に、2回目は2008年5～6月であった。多岐にみえた留学生らの自由記述回答も、分析枠組みをあてはめると、項目総数の分析誤差は5.8%、各項目間誤差の平均は3.9%で、90%以上の一致度を得た。大陸の参加生の回答も2度分析したが、小論で報告するのは両集団とも最新の結果、つまり2008年5～6月に分析したものである。次章の2節では質問1の友人観の結果に焦点をあてて報告する。なお、本調査で報告する統計結果は無回答を含まない数値である。また、自由記述式質問には、複数カテゴリーを含む回

答をした者があったので、回答総数の割合は100%を超える。

3. 結果

1) 対象者の背景

大陸からは4総合大学〔河南省（93人）、四川省（32人）、北京（93人）、重慶（27人）から各1校、計253人、うち3校は重点大学〕と1独立学院（吉林省、53人）で日本語を学ぶ学生が参加してくれた。参加生の総数は306人である。彼らの平均年齢は21.6歳（SD=3.06）で、性別は男性68人（22.4%）と女性235人（77.6%）。所属は学部生が258人（84.6%）、院生（修士のみ）が47人（15.4%）で、女性と学部生の多い集団である。また、生長地については、省都が69人（23.2%）、省都以外が228人（76.8%）で、地域で成長した者が多数いる。日本語能力は自己申告であるが、①講義を理解し、口頭発表ができる、②講義は理解できるが、口頭発表はできない、③日常会話は問題ないが、講義はあまり分からない、④知っていることをゆつくり話されれば分かる、の4段階で尋ねたところ、3分の2以上が2番目の「講義が理解できる」以上と回答した。日本語学習の動機（複数回答可）は、就職しやすい、日系・合併企業希望のためと就職関連の者が80%前後と多く、また留学が動機の者も平均で20.4%あった。

一方、留学生の参加者は計205人で、平均年齢が28.6歳（SD=4.95）、男性105人（51.2%）、女性100人（48.8%）で、近年の日本における留学生の男女比率が同傾向にあることと一致する〔平成19（2007）年度、男性50.6%、女性49.4%（文部科学省、2008）〕。日本滞在期間は3年未満の者が80人（39%）、3年以上が125人（61%）で、全体では68人（33.2%）が5年以上と長期滞在者が多い。所属は学部生28人（14.2%）、研究生13人（6.6%）、院生が156人（79.2%）〔修士課程81人（41.1%）、博士課程75人（38.1%）〕で院生の多い集団である。専門別には文系126人（64.3%）、理系70人（35.7%）の割合で、大学別には私立が40%強に対し、国立が60%である。日本語能力は講義が理解でき、口頭発表もできる者が70%以上で、口頭発表はできないが講義が理解できる者を合わせると84%になり、比較的高い言語能力をもつ。なお、留学生グループの生長地は、93人（51.4%）が省都、88人（48.6%）が省都以外の地域で、大陸の対象学生と比べて大都会出身者が多い集団である。

このように多様な背景をもつ2集団の中国人学生たちであるが、彼らはどのような友人観をもっているのか、次節で見てみよう。

2) 友人観

「あなたにとって友人とはどんな人ですか」という質問に対する全体の有効回答者数は418人（81.8%）で、内訳は大陸からの参加生が279人（大陸学生の91.2%）、留学生が139人（留学生の67.8%）である。さまざまな背景の特徴をもち、年齢範囲だけでも両集団合わせると17歳から49歳になる学生たちは多彩な回答を寄せてくれた。しかし全体を通して読むと、多様な表現のなかにかなり似かよった回答が多くあり、次の10カテゴリーからなる分析枠組みができた。それらは「誠実・信頼」、「相互扶助・協力」、「理解・尊重」、「気が合い話し合える」、「相似性」、「知性・能力」、及びパー

ソナリティ関連の「人柄の良さ」、「責任感・まじめ」、「明朗・活発・前向き」と、「その他」である。

まず、表1にまとめた留学生の回答結果をみると、1位に挙げられたのは「相互扶助・協力」(41.0%)である。精神的支え、励ましという表現から、「困っているとき助けてくれる人、困っているとき相談してくれる人」、「苦しいことも楽しいことも何でも互いに直面」、「友人のためにすべてを尽くす」までが記されていた。2位はパーソナリティ関連で、「人柄の良さ」(29.5%)である。やさしい、親切、思いやり、寛容、親しみやすい、穏やか、礼儀正しい等の表現が多かった。3位はコミュニケーション関係の「気が合い話し合える」(25.9%)カテゴリーである。本音で話し合うことができる、コミュニケーション上手、話せる人・聞ける人等の報告があった。4位は「誠実・信頼」(23.0%)で、簡単に、誠実、信頼できる、真心で接する、「心を開けて、心の交流できる人」等があった。続く5位は「明朗・前向き・活発」(17.3%)で、明るい、活発、楽天的等の単語が多かった。6位の「理解・尊重」(13.7%)には「私のことを理解してくれる人」から、「長所などを互いに認め合う」、「価値観、人生観が異なってもお互い認めることができ、相手の良いところと悪いところを認知する等の報告があった。7位は「責任感・まじめ」(13.0%)で、「研究・仕事にまじめで責任感がある」、「事実に基づき真実を求める」といった記述である。8位以下は10%に満たないが、8位の「相似性」(7.9%)は共通の専門・興味への関心、価値観が同じ等である。9位は「知性・能力」(3.6%)で、「勉強好きな人」、「自分の考え」、「真」のものをもつ人」等があった。「その他」には「偏見のない人」と共に「歴史問題の認識できる人」が複数書かれていた。

表1 日本の高等教育機関に学ぶ中国人留学生の友人観

分析カテゴリー	主な内容	頻度(%)
1. 相互扶助・協力	・困っているとき助け忠告をし合う ・すべてを尽くす ・協力、支持、励ます	57(41.0)
2. 人柄の良さ	・親切、やさしさ、暖かさ ・穏やか、落ち着き、寛容	41(29.5)
3. 気が合い話し合える	・気が合う、共にいること楽しめる ・深く話し合える、本音を言える ・悩みや喜びを分かち合える	36(25.9)
4. 誠実・信頼できる	・真心があり、信頼できる ・心の交流	32(23.0)
5. 明朗・前向き・活発	・明るい、楽観的、情熱的、積極性	24(17.3)
6. 理解・尊重	・相手の立場から相手を考え理解 ・価値観・人生観がちがっても互いを認める	19(13.7)
7. 責任感・まじめ	・研究・仕事にまじめで責任感がある ・事実に基づき真実を求める	18(13.0)
8. 相似性	・考え方、性格が似ている ・価値観が同じ／近い	11(7.9)
9. 知性・能力	・知識をもち、自分の考えがある	5(3.6)
10. その他	・立派な人、偏見のない人 ・歴史問題の認識できる人	12(8.6)

注：回答者数：139人（67.8%）

次に、表2に示した大陸の学生の回答は、1位は「人柄の良さ」(48.8%)である。記述には、やさしい、親切、寛容、思いやり、落ち着き、傲慢でない、礼儀正しい等があったが、内容は留学生集団のものと大差なかった。2位は「相互扶助・協力」(41.6%)で、苦楽を分かち合う、禍福を共に、一番苦しい時に助ける、「(相手が困っているとき、たとえ)何もできなくても話を聞いてくれる」から、「どんな犠牲でも」までがあった。3位は「誠実・信頼」(41.2%)で、真心、誠意、信頼できる、会わなくても心の奥で交流等があった。4位の「理解・尊重」(35.8%)には、互いに相手を考え理解、相手の立場から考える、関心をもつ、「互いを受け入れ、自分のペースももつ」等が記されていた。5位は「責任感・まじめ」(26.5%)で、カテゴリー名通りの表現から、正義感、公德心、真剣等である。6位の「明朗・前向き・活発」(20.8%)は、明るい、朗らか、積極的、外交的、楽観的等。7位は「気が合い、話し合える」(15.8%)で、腹藏なく、自由に話せる、「社会や生活、人生の問題を話し合える」から、「黙ってそばにいて聞いてくれる」までがあった。8位の「相似性」(11.5%)には、性格似る、共通の興味・話題、同じ人生の目標・理想、人生観・世界観同じ等の記述があった。9位は「知性・能力」で6.5%の回答であったが、「「講究」の人は友だち」、全体的視野広く、自分より知識があり、物事の対処原則があり、判断客観的等が記されていた。「その他」(13.6%)には「性格は相反しててもよい」、利益を求めない、人生に影響から、偏見をもたない、中国を好きな人、歴史を正確に認識できる、等の記述があった。歴史認識に関しては、特に「日本人に：歴史を直視・認め、謝罪」と記した人もあった。

表2 大陸における学生の友情観

カテゴリー	頻度(%)
1. 人柄の良さ	136(48.8)
2. 相互扶助・協力	116(41.6)
3. 誠実・信頼できる	115(41.2)
4. 理解・尊重	100(35.8)
5. 責任感・まじめ	74(26.5)
6. 明朗・前向き・活発	58(20.8)
7. 気が合い話し合える	44(15.8)
8. 相似性	32(11.5)
9. 知性・能力	18(6.5)
10. その他	38(13.6)

注：回答者数279人 (91.2%)

友人観に関して、対象者も回答も多彩であったにもかかわらず、分析をすると枠組みとなった10カテゴリーの順位に異なりがあるが、両集団共かなり似かよった配列を提示した。特に上位1, 2位は両集団で順序は入れ替わるが、「人柄の良さ」と「相互扶助・協力」である。留学生集団が「相互扶助・協力」を1位にあげていたのは、母国の支援グループから切り離されて、他者の支援をより必要に感じていたためかもしれない。「誠実・信頼できる」は大陸の学生たちは3位、留学生らは4位にあげている。「人柄の良さ」、「相互扶助・協力」、「誠実・信頼」は友情を考えるに不可欠の概念ではないかと考える。また、大陸参加生では4位だが、留学生は6位にあげる「理解・尊重」は、上位の「信頼」と関連すると捉えてよいのではないかと考える。さらに、母国にいる参加生たちにとっては7位であるのに、留学生らが「気が合い話し合える」を3位にあげるのは、殆どが寮住まいで友人が近くに、母国のことばでコミュニケーションで

できる大陸の学生に対し、外国滞在の留学生がリラックスして心を開けて話し合える友の重要性を一層強く感じていることを示唆するようである。「人柄の良さ」以外のパーソナリティについては、明るい前向きの性格で責任感のあることが評価されていると同時に、少数であるが高知性、能力

を求める人も両集団にいた。

3) 日本人との付き合いにおける困難

質問2の「日本人との付き合いで困ったことがあったでしょうか」に対しては、大陸の学生206人(67.3%)、留学生92人(44.9%)が有効回答を記してくれた。大陸で日本語を学ぶ対象学生たちのなかで、大都市にある大学の学生たちは日系企業や中国滞在の日本人への中国語教師、通訳のアルバイト等で日本人との接触があったのに対し、省都以外の大学生は日本人教師との接触が主であった。結果は表3にまとめたが、分析枠組みとしては、5番目のカテゴリーまでで、それ以下は「その他」で括れるほどの少数である。この問いに対して、留学生のなかには「良い友達に恵まれている」、「最初のとき困ったのは言語上の問題だったが、…問題がだんだんなくなった。…自分の悩みを相

表3 日本人との付き合いで困ったこと

留学生 有効回答=92人 (44.9%)		大陸の学生 有効回答=206人 (67.3%)	
分析カテゴリー	頻度 (%)	分析カテゴリー	頻度 (%)
1. 礼儀・習慣・思考法の相違	25(27.2)	1. ことば	94(45.6)
2. 日本人の話し方・対人関係	23(25.0)	2. 礼儀・習慣・思考法の相違	43(20.9)
3. ことば	19(20.7)	3. 日本人の話し方・対人関係	32(15.5)
4. 相手の個人的態度	8(8.7)	4. 日中間の政治・歴史問題	20(9.7)
5. 日中間の政治・歴史問題	6(6.5)	5. 相手の個人的態度	14(6.8)
6. 話題の選択	2(2.2)	6. 中国に対する知識のなさ	4(1.9)
7. その他	12(13.0)	7. 話題の選択	3(1.5)
		8. その他	14(6.8)

談してくれて本当にうれしかった」と記述した者があり、大陸の日本語学習者にも「友だちになった」と書いた人が複数にあった。しかし全体的に、両集団とも3位までは「礼儀・習慣・思考法等」、「話し方、対人関係のあり方」、「ことば」が日本人との出会いにおける困難であった。

留学生が日本文化の深く関わる「礼儀・習慣・思考法等」及び「話し方、対人関係のあり方」を1、2位に上げたのに対し、大陸の日本語学習者が「ことば」を1位にあげるのは両集団の語学能力の差が出たのであろう。「礼儀・習慣・思考法等」では「日本文化、社会理解できていない」、割り勘、価値観・考え方の相違、「礼儀正しいのか正しくないのか」、細かすぎ等を、両集団の回答者が書いていた。礼儀に関して、留学生には「親友になること難しい」と記した人もいた。「話し方、対人関係のあり方」については、曖昧、本音と建前、省略、言い訳、日本人の笑顔等の単語が多数あったが、「話し方、語法」は、「5年目位から分かるようになった」という文化理解に時間がかかる経験を報告した留学生もあった。しかし対人関係に関しては、両集団に「距離」を感じている人が少なくなかった。「親しくなっても「壁」感じる」、「常に一定の距離がある」、「日本人冷たい。

仲良くなっても距離をおく」、「友だち関係にはなるが、深い関係、親友にはなれない」等の記述があった。「相手の個人的態度」とは、「発表準備で忙しいのに、翻訳を頼む」といった相手方日本人個人の性格による困難である。「中国に対する知識のなさ」は両集団にあったが、留学生のほうは「その他」に入る数字であった。さらにこの問いに対しても、「政治・歴史の問題」は両集団で記されていたが、大陸からの参加生のほうは10%に近かった。

4. 考察

「あなたにとって友人とは」などという質問は友情研究には無意味であると社会学の視座から友情に関する研究をしたアラン（1993）は批判した。それは返答に最高レベルの友情、文化的理想が返ってき、現実には人々を作る友人関係分析には有用でないということである。筆者は一面においてアランの主張に同意する。実際、中国高等教育機関あるいは留日の中国人大学生・院生の友情に関する考えを知るには、彼らの日常生活における友人関係研究の必要がある。しかし、小論があえて対象中国人学生に友人観を尋ねた理由は、探索的研究の第一歩として、彼らにとって友人とはどんな人かという素朴な質問に回答がほしかったからである。そして、二つ目の理由は、アランの主張とは逆に、もし中国人大学生、院生にとっての理想の友人というものを知ることができれば、それは留日の中国人学生が滞在先で友人関係構築に悩むときの助けになる可能性があると考えたためである。真友を得るのは母国でさえ長い時間がかかることが多い。ましてや異国で異語を用いて信頼できる友人関係を得るのは、容易ではない。その過程で彼らがたえず心に母国における理想の友人像をもっていれば、理想と現実の落差に悲観や鬱積は一層増大するのではないか。友人観にも文化的異同があることを留学生自身が認識すれば、他国で現地の友人関係がうまくいかないときの否定的感情低減に役立つのではないだろうか。さらに、日本の留学生教育の関係者が中国人学生の主観的友人観を知るとは、彼らの文化理解ひいては学生個人の理解につながるであろう、と考えたのである。

しかし同時に、中国人学生の友人観が留学生教育関係者に資するには、彼らの現実の友人関係のあり方を認識し、主観と客観が揃ってこそ有用になる。本調査の中国人参加生が提示した友人観の上位回答、「人柄の良さ」、「相互扶助・協力」、「誠実・信頼」、「気が合い、語り合える」は、カテゴリーだけを見れば、どの国の学生を対象にしても得られるものかもしれない。より深い研究なくして、中国人大学生らの友人観の実態理解は困難である。しかし、小論の質問2の日本人との交流の困難に対する対象者の回答のいくつかに、中国人学生特有の友人関係を知る手がかりがあるようである。日本人との接触で「距離」を感じていた回答者が大陸の学生、留学生に複数にあった。その原因が単純に語学力不足の場合もあるが、他の要因の可能性もある。例えば、「相互扶助・協力」というカテゴリーに関し、友人たちの相互支援は多様であるが、一般に日本では大切にしている物の貸し借り等は、よほど親しい場合は別として、余りないと推測する。しかし、「謝る意識」、つまり「すまない」と感じる気持ちの比較研究を中国（106人）、台湾（122人）、日本（104人）の社会人を対象に行った鄭と上原（2005）は、相手の期待に添えない場合に（例、免許取りたての人から

車の借用を申し出られ断る場面等), 3集団の中で中国人グループが統計的に有意に最も高くすまなく感じていることを知見している。中国人はあまり謝罪をしなく、日本人が頻繁であることはよく知られているが、当該場面での日本人と台湾の対象者のすまないという意識は低い。中国では関係をもつ者は相対的に親密観が強く、相手を受け入れ、全力的に献身する規範があると言われる(園田, 2001)。

また、リラックスして胸襟を開いた会話ができることは友人同士なら、どの国でも当たり前であろう。しかし、どんなに親しい人々の相互作用にも「面子」(“face”)が係わるという研究(Goffman, 1967)がある一方、中国人に独自の体面があるという調査もある(梁・井上, 2003; 末田, 1995)。中国人の体面を保つ概念は「臉」と「面子」の2タイプがあり、前者は清廉潔白で道義的、信用できるという性格を他人に印象付けたいとする社会的体面で、後者は社会的影響力、能力、経済力がある等の印象を与える物質的な体面である(梁・井上, 2003)。中国人の誰もが「臉」があると見られることを望んでいるが、同時に、後者も重要で、自他の「面子」を守る互惠規範さえある。この場合の互惠規範とは、自分だけでなく他者の面子を立てることによって、他者が自分にそれを返す期待があることである。長い歴史の間に中国人は自他の体面を立てる巧みで多様な会話の術を発達させている。内山(1994, 85-86頁)から例を引こう。

内山が、親友でなく、ふつうの友人を料理店に招いて夕食をすると、出てくる料理を見て客が主人に料理の値段を尋ねるのが常であった。(内山は日本人読者に、ここで憤慨してはいけない、と留意を記す。)例えば日本円にして「3千円」とか答えると、「安い、実に安い」と客は答える。そして「もし、私たちが注文したなら、4千円以下ではない」と他の客を見渡して言うと、他の人たちが「そうだ、ことによったら6千円も取るねー」と相槌を打つ。「君のお顔だネー」と招待された友人らが、主人の顔を立っている場面である。

先の「謝る意識」の例は中国人の対人関係の深さを、内山の事例は会話における「立ち入り度」の深さを示唆するようである。文献調査の章の張(2002)の「親しき仲には礼儀なし」とも関連がありそうである。今ひとつ最近の若者の事例を記しておこう。今秋、日本を訪問した北京大学の院生、周の随筆に、「中国人は家族の結束や友人関係を大事にする。友人同士の割り勘は、中国人には水臭く感じるので、どちらかがおごるし、恋愛など相手の私生活にまでウルサイほど立ち入る」(朝日新聞, 2008年9月12日)とある。

「信頼」行動に関しては、山岸と同僚(清成・フォディ・山岸, 2007; 鈴木・金野・山岸, 2007)は、内集団同士の者のほうが内集団と外集団の者の組み合わせより、信頼の程度が高いのは、それが単に集団アイデンティティの問題でなく、「他者に対して利他的に振舞うことが、自分が他者から利他的に扱われる条件」(清成他, 2007, 520頁)という「一般交換の期待」に依ることを、実験研究をもとに主張する。つまり内集団の者同士の信頼行動は、自分たちが同じ集団に属しているとの認知でなく、集団場面で自身のためにも自集団の仲間を優遇する行動をとるだろうとの期待感であるということである。清成らは日本(79人)とオーストラリア(83人)の大学生、鈴木らは日本人大学生(81人)を対象に、信頼を「自分の身を相手に委ねる行動」(清成他, 2007, 519頁)と定義して行った実験で仮説を証明する。研究者らは内集団信頼行動の傾向はどの文化圏にもある可能

性を示唆する。しかしこれらの研究とは別に、山岸（2003）は、不確定要素の多い環境における日本人と米国人の行動を比べ、集団主義的文化の者は内集団の者をより信頼するが、個人主義的文化の者は外集団の者をより信頼する傾向があると報告する。一層客観的な信頼に関する研究が求められる結果である。現代中国人大学生・院生の友人との信頼関係を知るためにも、彼らの現実に近い調査が必要である。

なお、小論の参加生たちが複数に「歴史問題」について記していたことは、国際関係が友情成立の拘束になる事例である。ここでは、近年、両国の研究者による「歴史問題」共同研究会があり、さらに留学生受け入れ国としても躍進する中国で、日本からの学生は韓国に次いで2位であり（大塚，2008）、「壁」が低くなる試みや機会が多様にあることを記すにとどめる。

おわりに

最近のアジアからの社会心理学、文化心理学の発展にも関わらず、中国人大学生・院生の友情、友人関係に関する文献は多くなかった。心理学分野の対人関係研究は、類似性や自己開示概念と親密性の関係等に焦点があてられる傾向がある。日本の留学生教育に資するには、今後は、多分野にわたる日本在住中国人研究者の研究も含め、より総合的・体系的な文献調査を、日中比較文化の視点から行うべきであると考え。また質問紙技法、聞き取り等多様な方法論を用いて留日の中国人をはじめ、在中の日本人の学生も対象に、友人関係の具体的実像を明らかにする調査を行うべきであろう。

【注】

- 1) 小論は『中国人学生の授業観・教師観—国内学生と留日学生を対象に』（高等教育研究叢書94，広島大学高等教育研究開発センター，2008年）で報告した日中共同研究のデータ収集と同時にに行った友人観調査の報告である。データ集めには共同研究者の劉徳潤，王志松の両先生にご協力いただき，また，大塚豊先生には内山完造など貴重な書籍のご紹介をいただいた。感謝の意を表しておきたい。
- 2) 「会話の友」とは，大学により制度の有無があるが，留学生と留学生の母国での主要言語を学ぶ現地学生をペアにして，互いに言語，文化学習をさせる仕組みで，米国や日本でも用いられている。中国では「学友」とも称せられる。

【参考文献】

- アラン・G（仲村祥一・細辻恵子訳）（1993）『友情の社会学』世界思想社。
- 石井恵子・北山忍（2004）「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係：文化的視点による実証研究のレビュー」『社会心理学研究』第19巻3号，241-254頁。

- 内山完造 (1994) 『中国人の生活風景』 東方選書3, 東方書店。
- 王敏 (2001) 『「押し」の中国・「引き」の日本—脚下照顧, いま日本は自己認識を更新すべきとき』 インターワーク出版。
- 大塚豊 (2008) 『WTO 加盟後の中国高等教育の対外開放性に関する実証的研究』 平成17~19年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書, 広島大学教育学研究科。
- 北山忍 (1994) 「文化的自己観と心理的プロセス」 『社会心理学研究』 第10巻3号, 153-167頁。
- 北山忍 (2003) 「「自己」への文化心理学的アプローチ」 山口勸編 『社会心理学—アジアからのアプローチ』 東京大学出版会, 41-50頁。
- 清成透子・フォディ, M・山岸俊男 (2007) 「直接交換と間接交換が内集団信頼行動へ及ぼす影響」 『社会心理学研究』 第77巻6号, 519-527頁。
- 沢田慶輔 (編) (1974) 『青年心理学』 東京大学出版会。
- 末田清子 (1995) 「「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い: 中国人と日本人」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 第23号, 1-13頁。
- 鈴木直人・金野裕介・山岸俊男 (2007) 「信頼行動の内集団バイアス—最小条件集団を用いた分配者選択実験—」 『社会心理学研究』 第78巻1号, 17-24頁。
- 周玉慧・深田博巳 (2002) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究」 『社会心理学研究』 第17巻3号, 150-184頁。
- 周菲菲 (2008) 「日中交流 私は「日本通」になりたい」 『朝日新聞』 2008年9月12日付「私の視点」欄。
- 園田茂人 (2001) 『中国人の心理と行動』 日本放送出版協会。
- 高島俊男・成瀬哲生 (昭和60年 (1985)) 『中国古典詩聚花 友情と別離』 ⑧尚学図書。
- 高田利武 (2000) 「文化的自己観と企業改革・従業員意識」 松戸武彦・高田利武編著 『変貌するアジアの社会心理: 中国・ベトナム・日本の比較』 123-141頁。
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』 ナカニシヤ出版。
- 張雲生 (2002) 「中国における日本人留学生の異文化適応に関する一考察—対人関係を中心に—」 広島大学大学院国際協力研究科修士論文。
- 鄭加禎・上原麻子 (2005) 「誤る意識—中国人, 日本人, 台湾人の対照研究—」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 第33号, 99-119頁。
- 馬偉軍 (2003) 「中国人の帰属における自己奉仕的傾向と集団奉仕的傾向」 『社会心理学研究』 第19巻2号, 135-143頁。
- 毛丹青 (1998) 『につぼん虫の眼紀行』 法蔵館。
- 文部科学省 (2008) 「大学における外国人学生数」 『文部科学省統計要覧』 (文部科学省ホームページよりのアクセスに依った)。
- 山岸俊男 (2003) 「信頼」 山口勸編 『社会心理学—アジアからのアプローチ』 東京大学出版会, 131-145頁。
- 山口勸 (1991) 「「自己」の視点からの集団および文化差へのアプローチ」 『社会心理学研究』 第6巻3号, 138-147頁。

- 山口勸（編）（2003）『社会心理学—アジアからのアプローチ』東京大学出版会。
- 横田雅弘（1993）「異文化間の友人関係—留学生と日本人学生はどのように親しくなるのか」『現代のエスプリ』308, 至文堂, 90-98頁。
- 梁覚・井上ゆみ（2003）「中国人の社会的行動—中国文化におけるグループ・ダイナミックス」山口勸編『社会心理学—アジアからのアプローチ』東京大学出版会, 173-191頁。
- リン・パン（片柳和子訳）（1995）『華人の歴史』みすず書房。
- Altman, I., & Taylor, D. (1973). *Social Penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1982). Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.), *Cultures in contact: Studies in cross-cultural interaction* (pp.161-198). Oxford: Pergamon Press.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Chicago: Aldine Publishing Co.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Lee, R. Y., & Bond, M. (1998). Personality and roommate friendship in Chinese culture. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 179-190.
- Tam, B., & Bond, M. (2002). Interpersonal behaviors and friendship in a Chinese culture. *Asian Journal of Social Psychology*, 5, 63-74.
- Wong, S., & Bond, M. (1999). Personality, self-disclosure and friendship between Chinese university roommates. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 201-214.
- Yamagishi, T. et al. (1998). In-group bias and culture of collectivism. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 315-328.

Views on Friendship of Chinese Students in Higher Education Institutes in Japan and China

Asako UEHARA*

This study explored Chinese students' views on friendship because of a paucity of systematic research on their friendship relations. A questionnaire, including two open ended questions mentioned below, was administered to a total of 511 Chinese students (306 were in mainland China and 205 were studying in Japan). The first question asked their views on friends, and the other sought identification of interaction difficulties, if any, with the Japanese. Data were content-analyzed by using a framework of ten categories, "sincerity/trust," "mutual support," "mutual understanding/respect," "frank communication," "similarity," "intelligent/capable," "good personality," "responsibility," "pleasant/positive," and "other."

The results showed that, while the mainland students indicated (1) "good personality," (2) "mutual support," and (3) "sincerity/trust" as the top three categories, the students studying in Japan identified (1) "mutual support," (2) "good personality," and (3) "frank communication" as their counterparts. Although both groups of participants tapped important dimensions of friendship, the top category, "mutual support," and the third one, "frank communication" of the international students seemed to mean their stronger need of support and relaxed and frank communication with friends in a foreign country than the domestic students. Regarding the second question, in spite of the fact that several students answered that they had good Japanese friends, several participants in both groups described that, for the Japanese, they felt a psychological barrier and that it was hard to become bosom friends. The difficulties might be caused by a language deficiency of both Japanese and Chinese parties. However, the few related previous studies on Chinese psychology, behavior, and everyday lives suggested that, once the Chinese had a relationship with someone, they tended to accept the other wholeheartedly, and, therefore, the degrees of "ingress" of their communication were inclined to become deeper than the Japanese. Additionally, for each question, several participants indicated that the "political and historical issues" between the two countries were critical.

In order to discover more cultural differences and similarities on Chinese friendships, future research should investigate Japanese students in China as well as Chinese students in Japan with a variety of methods based on wide and systematic literature reviews in different academic fields such as communication, psychology, sociology, literature and so forth.

* Professor, Department of International Communication, Tokiwakai Gakuen University